

8月1日(土)~8月30日(日) 満月セレクト

— 今回のセクター ご紹介 —

Music Selector : 中川 五郎

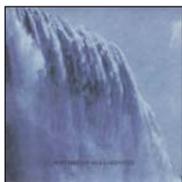


中川 五郎

大阪生まれ。60年代半ばからアメリカのフォーク・ソングの影響を受けて、曲を作ったり歌ったりし始め、68年に「受験生のブルース」や「主婦のブルース」を発表。70年代に入ってから音楽に関する文章や歌詞の対訳などが活動の中心に。90年代に入ってから小説の執筆やチャールズ・ブコウスキーの小説などさまざまな翻訳も行っている。2004年には26年ぶりのアルバム『ぼくが死んでこの世を去る日』をリリースし、最新アルバムは2006年の『そしてぼくはひとりになる』(シールズ・レコード)。1990年代の半ば頃から、活動の中心を歌うことに戻し、新しい曲を作りつつ、日本各地でさかんにライブを行なっている。

今回のセレクトCD

1.



The Milk Carton Kids / Monterey (Anti 87408-2)

それぞれソロのシンガー・ソングライターとしてカリフォルニアで活動していたケネス・パッテンゲールとジョーイ・ライアの二人が会って結成されたデュオの最新作。二つの声、二つのアコースティック・ギターが重なった時に生まれる魔法に陶酔させられる。まだ30代初めの二人だが歌われる歌は洞察力に富み人生を達観した者の哲学のようなものすら感じ取る。

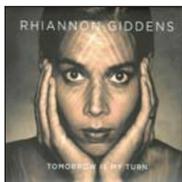
2.



Eric Kaz / Eric Kaz 「エリック・カズ：41年目の再会」 (Slice of Life SLCD-1018)

1970年代にボニー・レイットやリンダ・ロンシュタットが歌った「ラブ・ハズ・ノー・プライド」の作者として知られ、自らも当時二枚のアルバムを発表していたものの、ずっと歌うことから遠ざかっていたエリックが41年ぶりに新作を発表。2002年の日本公演で自分の歌をこんなにも楽しんでくれている人たちがいると感動したのが活動再開のきっかけなの嬉しい。誠実な歌の数々は燻し銀のよう。

3.



Rhiannon Giddens / Tomorrow Is My Turn (Nonesuch 7559-79563-1)

2005年にノース・キャロライナで開かれた黒人のバンジョー弾き達の集まりの中から生まれたキャロライナ・チョコレート・ドロップスのメンバーの初ソロ・アルバム。ドロップスの時も伝統に囚われない自由な歌や演奏が素晴らしかったが、このソロ作でもフォークの名曲やドリー・パートンやパッツィ・クラインの歌などをリアノンならではの溢れる個性と奥深い解釈とで歌い上げる。

4.



Marianne Faithfull / Give My Love To London 「ロンドンによろしく」 (naive / P-Vine PCD-24369)

今年3月に予定されていた18年ぶりの来日公演が中止になってしまったのがほんとうに残念。というのにもまだに日本ではマリアンヌと言えばミック・ジャガーの恋人だとかアラン・ドロンと共演した映画『あの胸にもう一度』のこととか、話題が50年ほど前で止まったまま。来日公演は今現在のマリアンヌを見せつける絶好の機会だった。でもこの最新作でも進化し深化するマリアンヌが存分に楽しめる。

5.



James Taylor / Before This World 「ビフォア・ディス・ワールド」 (Universal UCCO-1157)

マリアンヌと同じく歌い始めて50年近くになるジェームスのこの新作をさらっと聞いて、相変わらずだな、いつものジェームス節だなという印象を持つ人もいるかも知れないが、繰り返し何度もじっくりと彼の新しい歌に耳を傾けてほしい。昔と同じように旅や恋などを歌っていても、今の彼の歌には長く生きて歌い続けた者ならではの深い省察や知恵に満ちている。何よりも昔より若く明るいのが素敵だ。